

琉球大学学術リポジトリ

乳児の発育について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宜保, 美恵子, Gibo, Mieko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20999

乳児の発育について

昔から「子をもって知る親の恩」ということばがありますが実際に自分が子供を生み、育てる立場になってみて、このことがしみじみと感じられます。新米の母親は、自分の子供からは経験だけによる昔ながらの育児法ではなく、新しい心理学にもとづいた育児法をしようと考え、子供が生まれない先から育児書を求め、不安と期待のいりまじった気持ちでよむものです。しかし目のまえに実際に赤ん坊がないために読み流してしまうことも多くあります。それにひきかえ子供が生まれてからは、例へば、赤ちゃんがどうしても泣きやまないときなどは「泣きやまない赤ちゃん」ということばをさがして必死になって頁をめくりまわります。また同じ位の赤ん坊をもつお母さんが二、三人集まると身長は標準より何センチ、体重は何グラム多いですよ、本には3ヶ月で首がすわる

と書いてありますがうちの子供は2ヶ月で首がすわりましたよ、うちの子供は2ヶ月ですがミルクを4ヶ月の標準量の何ccも飲むですよ……数えあげればきりがいいほどこんな会話がつづきます。これらの育児に熱心なお母さん達を教育ママとか心理ママと呼んでいるようです。このお母さん方に共通していえることはなんでも「標準」ということばをもちだして、それに自分の子供をあてはめてみることです。自分の赤ちゃんがこの「標準」より大きい場合は大変発育がいいと喜びそれよりも小さい場合は「標準」を目ざして一生懸命です。ある6ヶ月になる子供をもつお母さんは、私の子供は身長は〇ヶ月の標準で、体重は〇ヶ月、胸囲は〇ヶ月とすべて体の各部分の発育を標準に照し合はせて話しておられました。

第1表 乳児身体発育値(昭和35年厚生省)

種別 性別 月令	体 重 (kg)		身 長 (cm)		胸 囲 (cm)		頭 囲 (cm)	
	男	女	男	女	男	女	男	女
1 ~ 2	4.7	4.5	55.4	54.2	37.8	37.2	37.9	37.0
2 ~ 3	5.7	5.2	58.5	57.2	40.3	39.1	39.4	38.8
3 ~ 4	6.3	5.8	60.9	59.9	41.6	40.5	40.7	39.9
4 ~ 5	6.8	6.4	63.2	61.9	42.6	41.5	42.1	40.9
5 ~ 6	7.4	6.9	65.5	64.0	43.4	42.3	43.1	41.9
6 ~ 7	7.8	7.2	67.0	65.4	43.9	42.8	43.9	42.6
7 ~ 8	8.1	7.5	68.5	66.8	44.3	43.2	44.3	43.1
8 ~ 9	8.3	7.7	69.7	68.2	44.5	43.6	44.6	43.5
9 ~ 10	8.5	8.0	70.8	69.4	44.8	43.9	45	43.8
10 ~ 11	8.6	8.2	72.0	70.4	45.1	44.1	45.4	44.2
11 ~ 12	8.8	8.4	73.1	71.6	45.5	44.5	45.7	44.5

第2表 月令別1日の平均体重増加量

生後の月令	0 ~ 3	3 ~ 6	6 ~ 9	9 ~ 12
1日の体重増加	27g	19g	9 ~ 12g	5g

(昭和35年厚生省)

このときのお母さん達はこの「標準」ということを子供の理想的な発育状態であると考えているものと思います。そのような考え方からしますと相撲とり型の赤ちゃんは最も理想的な発育状態を示しているといえましょう。しかし最近乳児で基準値をはるかにこえた肥満児の問題が出てまいりました。これらの肥満児は運動機能が遅れているようなものもあるといわれ、また、このふとりすぎの子供の60～80%が大人の肥満に直接つながっていくといわれます。

このような例からして一日中標準ということを目当てに子供を育てていますと、育児ノイローゼにかかってしまうのではないのでしょうか。このような心理 ママは育児に熱心でありすぎるために子供にとって好ましくない影響を与える場合があります。即ち母親の影響は何ものよりもつよく赤ちゃんを支配します。ことに赤ちゃんを一生支配する性格のもとをつくるのは、母親の生活態度です。子供はそれぞれ小さいながらも個性をもち、他所の子供と異なるばかりでなく、ひとときも同じ場所にとどまっておらず、たえず成長しつづけているのです。

それでは子供の身体発育について先にのべました「標準」とはどんなものか説明してみたいと思います。最も新しい標準値は昭和35年に厚生省から発表されたものです。(第1表参照)これは日本の現在の乳児の平均値を示したものでそれが理想的な発育状態であるかはわかりません。そのため厚生省でもこれを標準値といわずに基準値といっています。乳児の発育の良否の判定はただ体重が多ければいいというわけではありません。毎月の体重のふえ方が順調にしているかどうかで判断します。(第2表参照)発育の著しい乳児をもつお母さんは自分の子供をよく知ってその子供に適した育児態度をもつことが心身ともにすこやかな子供を育てる上に大切なことだと思います。

(宜保美恵子)